

痛みと赦し

痛みと赦し — キリストの前で

「リントの信徒への手紙Ⅱ 二・一—」
沖村裕史

「悲しみの原因となった人がいれば、その人はわたしを悲しませたのではなく、大げさな表現は控えますが、あなたがたすべてをある程度悲しませたのです。」

「悲しむ」という言葉が使われています。何があったのでしょうか。不祥事があったのかもしれませんが。詳しいことは分かりませんが、その不祥事は多くの人々の知るところとなったようです。パウロは今、不祥事を起こしたその人に対する自分の思いを、「悲しみ」という言葉で表現します。

祖母の悲しい顔を思い出します。
今から三八年前の夏、七〇歳の祖母が天に召されました。危篤だとの知らせを受けて、駆け付けた私を待っていたのは、一回りも二回りも小さくなった体をベッドに横たえている祖母でした。酸素マスクをつけているため、声をかけても返事は返ってきません。ただ、目から涙がこぼれていました。嬉しいのか悲しいのか、分かりません。分かりませんがふと、幼い時にいつも見ていた祖母の顔が思い出され、私も涙ぐんでいました。思い出されたのは、私に向けられる祖母の悲しそうな顔です。終戦の二年前に、夫を亡くし、あの混乱の時代に、一男

日本基督教団
塚口教会
〒661-0012
尼崎市南塚口町
2丁目34-3
電話 06-6429-3019

四女の子どもたちを女手一つで育て上げた祖母でした。それでも、辛さや不安をひとかけらも見せない人でした。見せないどころか、私の知っている祖母はいつも優しく、温かい人でした。そんな祖母が、ときに悲しい顔をする時がありました。私が悪いことをした時です。その悲しそうな顔を見ると、私はどうしようもなくたまらない思いになって、「ごめんなさい」と素直に謝ることができました。でもなかなかな謝ることをしない子どもだったからです。親や先生から怒られても、むくれたり、弁解したり、うそをついてごまかしたり、謝るといふことをしない子どもでした。謝っても赦してもらえない、と思っていたからです。しかし、祖母は違っていました。叱ることなど一切しませんでした。ただ、じつと見つめて悲しそうな顔をするだけです。どんなに悪いことをしても、謝れば、優しい笑顔になって必ず赦してくれました。だからこそ、その悲しい顔を見ると、心から「ごめんなさい」と言うことができず、そう言わずにはおれませんでした。危篤のベッドの上で、涙を見せた祖母は、私の顔を見て嬉しかったのでしょうか、それとも、悪いことをしてはいいないか、と心配をしてくれていたのかもしれない。

人は、自分のしたことについて、反省を自分の非を認める、ということがなかなかできません。自分の非が分かっているのではありません。分かっています。分かっ

ていますが、素直にそれを受け入れ、認めることができません。非があると分かっているのでも反省をします。自分だけではない、他の人もそういうことをしているのではないかと、というふうに考えます。そんなふうにして、自分に向けられている怒りや憎しみに対して、どこかで反省をします。

それでも、私が祖母に対してそうであったように、自分のしたことに対して悲しまれるとき、人は苦しくなります。悲しまれて、初めて自分の罪悪を知り、自分のやったことに対する自分自身の「痛み」を経験いたします。

その痛いほどの悲しみの中で、パウロはこう言います。
「その人には、多数の者から受けたあの罰で十分です。むしろ、あなたがたは、その人が悲しみに打ちのめされてしまわないように、赦して、力づけるべきです。」

「赦して、力づけるべきです」「赦す」とは、「許可」と書き、「聞き入れる」という意味を持つ「許す」ではありません。「恩赦」あるいは「赦免」と書く、「罪をなかつたことにする」という意味の言葉です。そのことは、なかなかできることではありません。なぜなら、赦すということは、痛みを自分が負うことを意味することだからです。自分が痛むことも苦しむこともなく、人を赦すことなど誰にもできません。赦すということは、自分も痛い思いをし、苦ししい思いをすることなのです。特に自分に関わる出来事、自分が赦さなくてはならないときには、何がしかの傷を自分も受けることとなります。無傷で赦すということはあり得ません。人々からの責めを、その傍に立って一緒に受ける。赦すということは、そういうことです。「力づける」ということもまた、ただ「頑張れ、しっかりやれ」と

言うことではありません。痛みを共有することです。一緒に苦しむことです、その罪のために、そのやったことのために、一緒に苦しんでいる者として力づけるということです。

なぜ、パウロがこういう言い方をするのか。いえ、できたのでしょうか。十字架のキリスト・イエスが、私たちの罪を自分の痛みとして、身に負い、そうして一緒に力づけてくださる方だったからです。離れたところから、「頑張れ」と言うのでも、上の方から「しっかりしろ」と声をかけるのでもありません。私たちの悩みのただ中で、私たちの痛みの中で、一緒に罪を担いながら、共にいて、励ましてくださるのです。これが、キリスト・イエスが私たちの救い主である、ということの意味です。それも、昔、かつて一度、ということではありません。今も、私たちの救い主でいてくださる、私たちの罪を担ってくださる、今も一緒に歩んでくださっている、そういう中で励ましをいただきながら、私たちは生きています。生かされて生きています。であればこそ、パウロは言います。

「私がかのことで人を赦したとすれば、それは、キリストの前でああなたがたのために赦したので。」

自分の広い心で赦す、というのではありません。そんなことなどできようはずもないけれども、ただ、キリストの前で赦す、と言います。受け入れ難きを受け入れ、赦し難きを赦してくださるキリストと出会い、十字架の愛に出会うところ、それがキリストの前です。そのキリストが、今もここで、私たちと共にいてくださっています。

(二〇一六年一〇月三日、
秋の伝道礼拝(二))